



ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和7年12月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いしましょう！



12月の映画

『フランケンシュタイン』

2025年 アメリカ 

Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員 (CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION ————— 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

フランケンシュタイン

(2025年)

幻想と悲劇が交錯する、デル・トロ渾身の怪物譚

『フランケンシュタイン』はギレルモ・デル・トロ監督による、『パンズ・ラビリンス』や『ヘルボーイ』でも見せた、幻想的で不気味な世界観の創出における卓越した手腕を、改めて証明する作品となっている。英文学の巨峰ともいえる『フランケンシュタイン』にふさわしい豪華キャストにも恵まれ、デル・トロ監督はまさに本領発揮といったところだ。ヴィクター・フランケンシュタインを演じるオスカー・アイザック、そして「怪物」を演じるジェイコブ・エロルディが二枚看板を務め、さらにチャールズ・ダンス、ミア・ゴス、クリストフ・ヴァルツ、デヴィッド・ブラッドリーといった名優たちが脇を固め、いずれも見事な演技を披露している。本作は、これまでの多くの映画化作品とは異なり、1818年版のメアリー・シェリーの原作に大きく立ち返ったアプローチが特徴である。

まず初めに言いたい——なんと
いう素晴らしい映画だろう！ そし
て何より、徹底的に「ゴシック」
だ。デル・トロ監督は、心に思い
描く“幻想的で、ゴシックで、ヴ
ィクトリア朝風”の『フランケン
シュタイン』像を余すところなく
映像化してみせる。（こういった
作品はトレンドになっているか
もしれない。実際、すでにロバ
ート・エガース監督の『ノスフェ
ラトゥ』がドラキュラ像を再解釈
しているように。）

深い影とろうそくの灯りが揺れる
ヴィクトリア朝の室内——どこか
『アマデウス』や『バリー・リン
ドン』を思わせるような照明美
と、劇的で嵐に満ちた夜の描写
が、この象徴的な世界観に完璧に
調和している。衣装も見事で、特
に女性は鮮烈な深紅や深みのある
青、風変わりなヘッドピースな
ど、非現実的で色彩豊かなデザ
インが作品全体のドラマティックな
雰囲気さをさらに引き立てている。

映像美は圧巻の一言に尽きる。撮
影監督は『シェイプ・オブ・ウォ
ーター』でデル・トロ監督と組
み、同作でアカデミー撮影賞を受
賞したデンマークの名手ダン・ロ
ーストセン。これほど美しい画作
りになるのも納得だ。カメラは常
に動き続け、どこか落ち着きがな
く、狂気に飲まれていく科学者を
演じるアイザックの演技を映像が
そのまま体現しているようでもあ
る。特に心を奪われたショットが
二つあり、ほかのレビューでも話
題になっていたのを見かけた。古
典音楽を中心とした幽玄で美しい
OSTも映像と調和し、作品が目指
す陰鬱で退廃的な雰囲気さを完璧に
作り上げている。

CGI と実写の特殊効果の融合も見
事だ。アニメトロンクスを使った
シーンもあれば、アクションの多
くは高度な CGI によって描かれ
るなど、双方を巧みに使い分けて
いる。も実写とデジタルの絶妙な
混合で構成されている。

そして特筆すべきは、この映画の決して生ぬるくないところだ。かなりの流血描写があるが、トーンにはこの上なく合っており、一般人を狙って表現を弱めるような妥協をしなかった姿勢はむしろ称賛したい。

さらに、昨今のマーベル映画でよくある皮肉的なユーモアが他作品にまで浸透し、真剣さが揶揄されがちな風潮とは一線を画し、最初から最後まで真剣な姿勢を貫いている。このブレなさは、実に清々しい。

150分という長さにもかかわらず、冗長さは一切感じず、最初から最後まで惹きつけられ続けた。とりわけ俳優陣の演技が素晴らしく、オスカー・アイザックとジェイコブ・エロルディはまるで

総じて、この作品を映画館で観られない人が多いのは本当に惜しい。ネットフリックスで観られるとしても、もし可能であれば前橋シネマハウスでの鑑賞を強く勧めたい。文学史に残る偉大な作品を、忠実かつ現代的に再解釈した本作は、まさに映写幕で観るに値する映画である。

“どちらがより優れた演技を見せるか”という真剣勝負をしているかのようだ。チャールズ・ダンスは『ゲーム・オブ・スローンズ』で見せた冷徹な威厳を思わせる父親役で強烈な印象を残し、ミア・ゴスも素晴らしいが、個人的にはオスカー・アイザックの気迫が凌駕しているように感じられる場面もあった。

物語については、原作や既存の映画を知らない人のためにネタバレは避けるが、本質的にはギリシャ神話に代表される「人間の傲慢」を描いた物語であり、原題『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』がまさにそれを示している。文化を問わず響く力強いテーマを持った物語だ。